



佐藤彥大

本格派ピアニストが紡ぐ 至高の名曲特集

佐藤彥大の名曲特集が凄い！

洗練されたプログラムと、響きの彫刻によって描かれる
”大人の名曲”

Program

- リヤードフ: オルゴールop.32
- シューベルト: 12のレントラ-D790
- プーランク: 即興曲第12番「シューベルトを讃えて」
- ラフマニノフ(リチャードソン編): ヴォカリーズop.34-14
- ショパン: バラード第3番変イ長調op.47
- リスト: 愛の夢第3番変イ長調
- ブラームス: 6つの小品op.118より第5番「ロマンス」
- ドヴォルザーク(ケラー編): スラヴ舞曲第3番変イ長調op.46-3
- シューマン: 謝肉祭op.9
「4つの音符による面白い情景」

2025年
5月17日(土)

開場 14:30/開演 15:00

入場料: 会員4,000円(座席指定可)
一般4,500円/学生2,000円(全席自由席)

未就学児童の入場可能
※未就学児童は保護者1名につき1名まで膝上無料



公式ご予約フォーム



イープラス



123
Shibuya Mitake Salon (vol.177)

本格派ピアニストが紡ぐ至高の名曲特集 佐藤彦大

2025年5月17日(土)

開場 14:30/開演 15:00 入場料:会員4,000円(座席指定可)/一般4,500円/学生2,000円(全席自由席)

未就学児童の入場可能

※未就学児童は保護者1名につき1名まで膝上無料

123

Shibuya Mitake Salon (vol.177)



佐藤彦大の名曲特集が凄い!

洗練されたプログラムと、響きの彫刻によって描かれる“大人の名曲”――

佐探究心と精緻なピアニズム——佐藤彦大の音楽世界

佐藤彦大のピアノは、一度聴けば誰しもがその精巧さに驚かされる。

響きの純度、フレーミングの緻密さ、楽曲の本質を掘り下げる探究心

――彼の演奏には、常に音楽への深い洞察と斬新なアイディアが感じられる。

しかし、それは単なる技巧の妙に留まらず、独自の歌心によって聴き手の心を描きさぶる表現へと昇華されている。

彼の演奏を形容するならば、「繊細なオルゴール」のような音楽といえるだろう。

音と音との隙間にまで神経が行き届き、響きが研ぎ澄まされ、楽曲の構造が透徹して見えてくる。

そこに宿るのは、長年の研究と実践の積み重ねによって培われた職人の技である。

また、佐藤は東京音楽大学で、多くの学生の指導者として後進の指導にあたり、その教育においても「見えないものを洞察し、新たな視点を提案する」彼ならではの工夫に満ちた指導を行っている。

その証拠に、彼の門下生がコンクールなどで活躍する姿を目にすることが少なくない。

これほどまでに「探究心」を持ち合わせた演奏家は、稀有名な存在といえる。

そんな佐藤彦大だからこそ、耳の肥えた聴衆が集う美竹サロンで、「名曲特集」という企画を実現してくださっている。今回も、誰も思いつかないような独創的な企画が提案されてきた。

佐藤彦大の名曲特集は、今回で3回目だ。

毎年、キャンセル待ちも続出となり、超満員の人気企画となっているのは、まさに、佐藤のピアニズムが多くの人々を惹きつけているからだろう。

プログラムに込められた意図

今回のプログラムは、一見すると、親しみやすい名曲集のように思えるが、その構成には明確な意図がある。作品の流れの中に、「夢・郷愁・愛・舞踏・幻想」といったテーマが織り込まれており、それらが時代や作曲家の個性を超えて響き合う構成になっている。

〈前半〉精密さと詩情、舞踏の躍動感

冒頭のリヤード曲《オルゴール》Op.32は、わずか2分ほどの小品ながら、精密なタッチと響きの美しさが求められる作品である。

前回の公演ではモーツアルトの《アヴェ・ヴェルム・コルプレス》で、息を飲むような透明感を味わわせてくれたが、今回はさらに繊細な表現が求められる。

続くショーベルトの《12のレントラー D.790》は、素朴で愛らしい舞踏のリズムが特徴。

そこからブーランク《即興曲第12番(ショーベルトを讃えて)》へと続くことで、ショーベルトへのオマージュと、ブーランクの洒脱な音楽語法の対比が浮かび上がる。

ショーベルトを敬愛する佐藤ならではのこだわりが垣間見える選曲となっていることに目を見はる。

ラフマニノフの《ウォカリーズ》は、リチャードソンによるピアノ編曲版。

言葉を持たない旋律美が、ピアノ独奏によってどのように再構築されるのかに注目したい。

ショパン《バラード第3番》は、詩的な旋律と劇的な展開を併せ持つ、洗練された名作。

この作品には「歌心」が求められるが、それこそ佐藤彦大の真骨頂といえる部分だ。

《愛の夢 第3番》は、リストの代名詞ともいえる作品。

フライリヒラートの詩「おお、愛しる限り愛せ」に基づく甘美な旋律と華麗な技巧が交錯する。

とともに歌曲として作曲されたが、リスト自身によってピアノ独奏版へと昇華された。

そして、 ブラームス晩年の円熟した温かみと、穏やかな愛情に満ちた《6つの小品 Op.118 より第5番(ロマンス)》、そしてドヴォルザークの《スラヴ舞曲 第3番 変長調 Op.46-3》へと続く。

ドヴォルザークがブラームスの《ハンガリー舞曲》に触発され、民族音楽の要素を取り入れて作曲したスラヴ舞曲集。

この2つの作品を並べた流れには、こだわりを感じられる。

〈後半〉詩情に満ちたシューマンの「カーニバル」

後半は、シューマン《謝肉祭》Op.9「4つの音符による面白い情景」。

近年、この作品のフランス語副題「Scènes mignonnes sur quatre notes」(4つの音符による可愛らしい情景)が表記されるようになったのは、シューマンの創作意図を尊重する研究の進展によるものだ。

実らなかった恋の相手、エルネスティーヌ・フォン・フリッケンの故郷「アッシュ(ASCH)」のスペルを音名に置き換え、その音列を主題として用いるという巧みな発想から生まれた。

さらに、シューマン自身や彼の周囲の音楽家、作家、架空のキャラクターが登場するという独創的な構成を持つ。

そして佐藤彦大のピアニズムの真価が発揮されるのは、まさにこうした作品だ。

彼の演奏の魅力のひとつは、精巧さに加え、まるでオペラを観ているかのように、多彩なキャラクターを演じ分けていることにある。

まるで「百面相」のように音楽の表情を変え、登場人物たちに生命を吹き込んでいく。

その自在な表現力には、驚嘆せざるにはいられない。

名曲の輝きをどう響かせるのか

これほど多くの名曲を、その作品ごとの個性を際立たせながら瞬時に演奏するには、並外れた技量が必要だろう。

彼がこれらをどのようなアプローチで演奏するのか、彼の探究心がどのように結実するのか…。

それを目の当たりにしたとき、私たちは音楽的にも感情的にも、真の豊かさを体験することになるだろう。

(渋谷美竹サロン)

佐藤彦大 (SATO Hiroo) Piano

盛岡市出身。東京音楽大学大学院(ピアノ・エクセレンス)修了、ベルリン芸術大学及びチャイコフスキイ記念国立モスクワ音楽院において更なる研鑽を積む。在学中ロームミュージックファンデーション、明治安田クラリオティオブライフ文化財団より奨学金を得る。2007年第76回日本音楽コンクール第1位、2010年第4回仙台国際音楽コンクール第3位、2016年第62回マリア・カナルス・バルセロナ国際音楽コンクール第1位。大友直人指揮/東京交響楽団、小林研一郎指揮/日本フィルハーモニー交響楽団、広上淳一指揮/京都市交響楽団、山下一史指揮/仙台フィルハーモニー管弦楽団、L.ヴィオッティ指揮/ビルバオ交響楽団、A.サラド指揮/セビーリャ王立交響楽団等、国内外の主要オーケストラと共に演奏。録音ではライヴ・ノーツより「Hiroo Sato plays 3 Sonatas」「Hiroo Sato Piano Recital」、ベルウッド・レコードより「Japonisme菅井知延子作品集」をリリース。また、2020年には「佐藤彦大アンコールピース集」を自主制作した。

現在、東京音楽大学専任講師、桐朋学園大学非常勤講師。

ミリオンコンサート協会所属アーティスト。 <https://www.hiroosato-hikodai.com>



世界に通用する才能溢れる
トップアーティストが
続々と集結!

大ホールのプラチナ席をしのぐ
生演奏の醍醐味、
一期一会で味わう圧倒的な臨在感。

日本のトップクラスの演奏家たちが、

こだわり抜いた価値ある企画をお届けしていきます。

渋谷美竹サロン(美竹清花さん)が追求する

“本物の音楽”は、演奏者と参加者とわたしたちの、
三位一体の努力と対話から生まれます。



Shibuya
Mitake
Salon



お問い合わせ

株式会社 ILA 渋谷美竹サロン (美竹清花さん)

東京都渋谷区渋谷1-12-8 (〒150-0002)

03-6452-6711 (平日 10:00-18:00)

070-2168-8484 (時間外可)

Fax 03(3409)0188



公式Webサイト